



## 学芸員の視点 ②③

平成23年度の新収蔵作品について —— 出原 均

## ショート・エッセイ ④

カミーユ・ピサロと印象派—永遠の近代 —— 鈴木慈子

## トピックス ⑤

「カミーユ・ピサロと印象派」展 関連行事

50回目を迎えた県展

兵庫県立美術館でのIPMIについて

## 美術館の周縁 ⑥

学芸員の採用をめくって

—美術史学会シンポジウムの参加報告—— 小野尚子

## ARTRAMBLE

一見すると、黒くて四角い箱です。側面が無機質にツルツルとしているのに対して、上部一面は不規則に刻まれた凹凸で覆われています。とらえどころが無く、どこか神秘的な存在感をまとうこの作品は、いったい何を表しているのでしょうか。

この作品の作者、福岡道雄は、1936年大阪府堺市生まれ。早くから彫刻家を志し、それまでに無い新たな手法や表現を探ってきました。ポリエチレンを焼き付けて様々なゴミをくっつけたり、空気そのものを彫刻で表現しようとしたり。その後は、黒い強化プラスチックを使った独特の風景彫刻を作り始めます。ひざ丈の高さに身近な世界を再現するこのシリーズでは、始めこそ木や家や、あるいは作者自身の姿である小

さな人物像が立っていたものの、それらは徐々に姿を消していきました。

《波・北風》では、ただ現れ消える波のみが刻まれています。川、湖、海。その水面を眺めるうちに、いつしか意識は一人歩きを始め夢に戯れる、というのは誰もが一度は経験したことがあるでしょう。そうしてはっとして我に返ると、目の前に端然と広がる自然の姿に、取り残されたように感じることも…。こうした世界を淡々と写し取っていった作者の、つくる行為そのものが浮かび上がってくるようです。

(小野尚子／当館学芸員)

コレクションから



福岡道雄 (1936-)

《波・北風》

1978年

FRP、木

110.0×90.0×47.0cm

平成23年度山口雅也氏寄贈

# 平成23年度の 新収蔵作品について

出原 均



村上華岳《早春風景》1919年

## 1 総論

昨年度は、諸般の事情から作品の購入ができず、寄贈のみによる収蔵となった（一昨年度から手続きだけが続いた購入については本誌32号に記載済）。しかし、その質・量ともに充実している。総点数は、249点である。近年、収蔵点数が増加の傾向にあるとはいえ、この数は突出している。これには、S・W・ヘイター の作品をまとまって受贈したことが大きい（洋画33点、素描7点、版画151点）。総数をジャンル別で見ると、日本画2点、洋画34点、素描7点、版画187点、彫刻4点、写真14点、その他1点となり、確かにヘイターの占める割合は大きいものの、他の寄贈作品がジャンルに広がりをもたらしていることもわかる。とくに写真の増加は顕著である。現代美術が多数を占めるが、近・現代美術の両方を収蔵できたことは喜ばしいことである。

## 2 作品

以下、ジャンル別、作者別に作品について多少の説明を行いたい。

### (1) 日本画

◎村上華岳（1888―1939）《早春風景》（1919年）《菩提樹下観法之図》（1934年）当館への作品寄贈を継続していただいている伊藤文化財団（昨年度のコレクション展における同財団寄贈作品の特集展示は、その重要さをあらためて証明した）から、昨年度、寄贈いただいたのが、神戸ゆかりの日本画家、村上華岳であった。《早春風景》は、華岳30歳代初めの作で、線描を抑えた、色のグラデーションによる洋画風の風景画である。遺族の旧蔵品。もう一点の《菩提樹下観法之図》は、晩年の作で、対照的に線描が際立つ。当館では、華岳の作品は、これまで購入・寄贈あわせて21点収蔵してきたが、こうしてあらたに優品2点を加えることができた。

### (2) 洋画、素描、版画

◎スタンリー・ウィリアム・ヘイター（1901―1988）《家》（1925年）など油彩、水彩、素描、版画191点  
今回特筆すべきは、S・W・ヘイターのまとまった作品群を寄贈いただいたことである。兵庫にあった画廊からヘイター作品を購入し続けてきた個人の方が、当館に

一括寄贈されたのである。

ヘイターは、パリでアトリエ17という版画工房を開き、多くの芸術家との親交があった。第二次世界大戦の戦火を逃れて滞在したアメリカでも工房を開き、J・ポロックらもそこで版画制作をしている。松谷武判など、日本人の中にもヘイターに師事した作家がいる。ヘイターは、ウィリアム・ブレイクの技法を再現し、一版多色刷りを試みる一方、シュルレアリスムや熱い抽象など、時代の表現を積極的に取り込んだ、20世紀の代表的な版画家である。

前身である近代美術館時代から、版画のコレクションを収集の柱にしてきた当館にヘイター作品はふさわしい。これまでに5点の版画を収蔵していたが、各時代を網羅する多量の作品を収蔵したことで、当館におけるヘイターの位置づけは大きく変わることになる。調査研究の進展が図れるし、その蓄積をもとにして、ひとつの企画展を開催することもできるだろう。

◎船井裕（1932―2010）《SUPPOSITION》（1968年）など版画10点到油彩の《無題》（1962年）1点  
洋画の《無題》では、物質感が抑制された透明な膜は、焼かれて焦げ、穴が開くことで、逆に物質感を強く表すことになった。物質性が強調された1960年代の美術状況をよく表す作品である。版画においては、船井は、円筒形を空間ごとずらすなど、グラフィック・デザイン的な感覚の中で思考実験を繰り返していた。その展開を窺える何点かを収蔵した。遺族からの寄贈である。

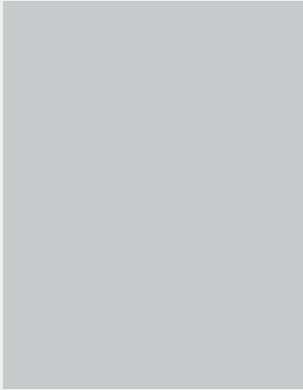
◎井田照一（1941―2006）《Orange Message》（1967年）など19点

井田の基本コンセプトは、「Surface is the Between（表面は間）」である。表面を、閉じた完成態とするのではなく、あくまでも関係の中のひとつとして捉えることを意味する。そのコンセプトによって、物理的な表裏の関係からはじめ、時間的な関係や、人工と自然の関係など、様々な関係性の実験を行ってきた。当館既収蔵の《Descended Blue》（1983年）では、この作家の一面しか紹介できなかった。今回の作品もその実験の一部でしかないが、その豊かさを垣間見せることはできるだろう。イダショウイチスタジオからの寄贈。

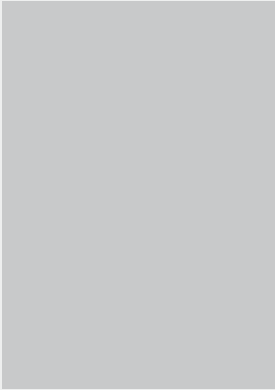
◎鎌谷伸一（1948―2009）《76―9》（1976年）など6点



スタンリー・ウィリアム・ヘイター  
展示風景より



船井裕《無題》1962年



井田照一〈Paper Between Same Line and Same Line No.3 (Portfolio "Surface is the Between" -Lotus Sutra2より)〉1979年



元永定正《きいろとぶるう》2011年

鎌谷の作品は、紙がめくれる様をイリュージョンで表した、自己言及的な初期から、グリッドなどのシンプルな構成ながら、版の重ねにより豊かな表情を引き出した中期、表現主義的な要素が導入された晩期に分けることができよう。各時代の代表的な作品を、遺族からご寄贈いただいた。

以上、井田、船井、鎌谷は、世代的に少しずつずれているが、主に1970年代に活躍しているので、三者三様ながら、コンセプト重視の特徴がよく現れている。3人とも、最も活躍した時期の作品に、初期作品も（鎌谷の場合は、後期も）加えているので、多少作風の変遷も紹介できるだろう。

### (3) 彫刻

◎井田照一《Between Globe and Globe-Twelve Months》（1989-91年）  
井田の彫刻も寄贈いただいた。井田は、版画から絵画、陶芸、彫刻にまで活動を広げたが、それらにおいても関係性を造形の核に据えていたことが窺える。  
◎榎忠（1944―）《BLOOM》2点（2011年）

昨年度、当館で開催した大規模な個展の出品作であり、その記念として作者から寄贈の申し出があったものである。溶鉱炉から圧延しながら取り出された鉄の先端部分で、本来処分されるべきものを、最小限の手を加えることにより、作者は美術作品として蘇らせたわけである。鉄への嗜好、廃品の蘇生、見立ての面白さ（上部の窪みは、タイトルのごとく花のようにも、また、断崖の風景のようにも見える）など、榎の美学をよく表している。既収蔵作品2点と合わせて榎作品は4点収蔵することになった。

◎福岡道雄（1936―）《波・北風》（1978年）  
福岡道雄の「風景彫刻」。長らく個人の方が所蔵していたが、代表的な作品が一般の目に触れることを望んだ作者に賛同され、当館に寄贈いただいた。解説は、本誌巻頭の頁に譲る。

◎元永定正（1922―2011）《きいろとぶるう》（2011年）  
本作品は、2年前の陶作品「くるくるきいろ」に続き、当館建物の設計者、安藤忠雄氏と由美子夫人、それに作者自身を加えた3人により寄贈された屋外作品である。「人」の文字を造形化した本作品は、南の大階段前に設置された。作者の逝去により、最晩年の作品となってしまった。

### (4) 写真

◎椎原治（1905―1974）《流氓ユダヤ ヘブライの書》（1941年）など7点  
昨年度からの購入手続きで、椎原の作品を9点収蔵したが、遺族からまとまったコレクションとなるよう、7点の寄贈申し出があった。そのうち、3点は、椎原が属していた丹平写真倶楽部のメンバー6人が撮影した、神戸のユダヤ人難民の連作の一部。

## 学芸員の視点

また、東京美術学校西洋画科を卒業した椎原は、技法を駆使した造形性の高い作品を発表したが、今回、寄贈を受けた《ALLEMANDE》や《手》などにはその特徴がよく現れている。

◎森村泰昌（1951―）「なにものかへのレクイエム」シリーズ5点（2007、2010年）  
森村の寄贈作品も、榎作品と同じように、一昨年度から昨年度にかけて当館を含めた4会場を巡回した個展「なにものかへのレクイエム」に出品されたもので、作者からの申し出による。レーニンを題材とした2点は、ロケ地が大阪の釜ヶ崎、独裁者を題材とした2点は、大阪市中央公会堂であり、最後の1点は、エキストラとして関西の美術関係者が出演しており、いずれも関西との縁の深い作品である。

個人コレクター所蔵のものを伊藤文化財団が購入し、当館に寄贈いただいた作品群は、小品・中品が中心であった（一昨年度、コレクション展中の小企画「[その他]のチカラ 森村泰昌の小宇宙」でまとめて展示された）が、今回、大作を収蔵することができ、森村作品を多角的に紹介できるようになった。

◎ヤノベケンジ（1965―）「アトムスーツプロジェクト」シリーズ2点（1997年）

昨年度購入した《Ferris Wheel》の関連作品であることから、作者の好意で収蔵することになったものである。作者が自作のアトムスーツを着てチェルノブイリに出かけ、その姿を撮った写真をライトボックス化したもので、2つの写真に見える、チェルノブイリの観覧車と、同じく保育園の部屋に描かれた太陽の絵は、《Ferris Wheel》のモチーフである。

### (5) その他

◎トン・マーテンス（1946―）《長田区の壁（紙のモニュメント）》（1997―2011年）  
1927年に公設市場の延焼防火壁として設置され、太平洋戦争の空襲にも、阪神・淡路大震災にも焼け残った「神戸の壁」が、震災後、区画整理のために撤去されることになり、その前にその姿を記録すべく、オランダのアーティストがフロッタージュした作品。作者本人による寄贈。版画、私家版の本などとともに、作者がデザインした木箱に納められている。

### 3 最後に

今回も、個々の作品の紹介で触れたように、個人コレクターの方、作者や遺族の方に貴重な作品をご寄贈いただいた。また、美術館との間を仲介していただいた方も決して忘れてはならない。皆さんのご協力のおかげで当館のコレクションがますます充実することになりました。ここに記して感謝の意を表します。

なお、これらの新収蔵作品の主なもの（残念ながら、すべてを紹介するには作品数が多すぎて不可能）は、現在、コレクション展Ⅱの新収蔵作品展（7月7日～11月4日）でお披露目当中である。 （ではら・ひとしノ当館学芸員）



# カミーユ・ピサロと印象派 —永遠の近代

鈴木慈子



「海のデッキ」からの眺め

当館の「海のデッキ」からの眺め。上方に空が広がり、  
ショート・エッセイ 遠くの道路に車が行き交い、対岸には倉庫が立ち並ぶ。

運河を見下ろすと、大小の船が通っていくの見える。光の当たり具合や天候によって、水面の表情は常に変化し、雨に暗く沈む日もあれば、無数の輝きをまとう瞬間もある。この景色は、カミーユ・ピサロが描いた絵に似ている。

開館10周年記念「カミーユ・ピサロと印象派—永遠の近代」展は、初期から晩年まで、ピサロの画業を網羅した展覧会であった。このエッセイでは、出品作の中から、フランスの都市ルーアンのセーヌ河にかかる橋を描いた2枚について述べようと思う。イギリスのバーミンガム美術館とルーアン美術館（オルセー美術館より寄託）所蔵の作品である。

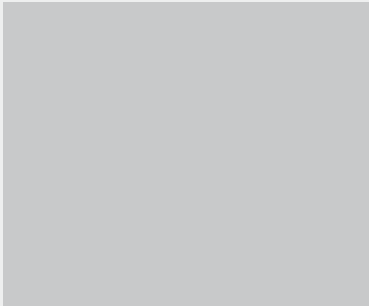
1896年の1月から3月にかけて、65歳のピサロは川べりのホテルに滞在し、大聖堂を中心とする旧市街のある右岸から、新市街のある左岸を見ている。沈みゆく太陽の光を受けるセーヌの川面は、絵の具が厚塗りにされ、細かく重なりあい、深みのある絵肌になっている。画面の上下に広がる空と水の織りなす自然の間に、人間の営みが描かれる。絵の中心には、ポイエルデュ橋が据えられている。石と鉄の組み合わせられた橋桁はどっしりと重厚で、橋の上にはたくさん往来がある。人々は馬車に乗り、あるいは徒歩で、川を渡っていく。向こう岸に目を移すと、左に真新しいオルレアン駅があり、停泊する船や遠くの煙突は、その近代性を誇るかのように蒸気や煙を吐き出す。人々の喧噪や、船の汽笛、鉄道の音が聞こえてきそうである。

2枚は構図が類似しており、いずれも日没の景色であるが、空や陰影、煙の表現などが異なっていることに気がつく。連作というかたちで、自然のもたらす「効果」を描き分ける制作態度は、ピサロが生涯を通じて追求めた「印象主義」を考えるうえで重要なものである。加えて、彼が描いた風景の中でも、これらはとりわけ近代的である。

ルーアンは、ノルマンディー公国の首都として栄えた古都である。壮麗な大聖堂や、木組みの建物が並ぶ街角、市街の西に位置するサント＝カトリヌの丘から見たパノラマは、多くの画家たちを魅了してきた。19世紀に限ってもターナーや



〈ルーアンのポイエルデュ橋、日没〉1896年  
バーミンガム美術館©Birmingham Museums



〈ルーアンのポイエルデュ橋、日没、煙〉1896年  
ルーアン美術館（オルセー美術館より寄託）  
©RMN(Musée d' Orsay)/ Hervé Lewandowski



サント＝カトリヌの丘からの眺め

コロー、モネらが次々とルーアンを訪れ、制作を行っている。ピサロも1883年には丘からの眺めを、1896年と1898年には大聖堂を描いている。モネが1892年と93年の滞在時、聖堂のファサード（正面）をとらえた連作を20枚以上描いており、それらを意識してか、ピサロが描いたのは聖堂の正面ではなく、南側面であった。ただ、ピサロがルーアンで制作した作品として数が圧倒的なのは、河岸のホテルから俯瞰した港湾都市の眺めである。

私がルーアンを訪れたときに驚いたのは、季節を問わず、天気安定しないことであった。青空が広がっていたかと思えば、灰色の雲がたちこめ、みるみるうちに雨に見舞われ、また陽が射してくる。ピサロも画商のデュラン＝リュエルに宛てて、ルーアンでとても変わりやすい天気と格闘している、と書き送っている（1896年2月12日付け）。連作を完成させるまでに、老年の画家はどのくらいの時間を費やしたのであろうか。作品の前に立つと、ゆっくりと、ていねいに、筆をおいていく姿が思い起こされてならない。刻々と変化する景色を常に観察しながら、繊細なタッチを重ねていったのであろう。

1896年秋、ピサロは再びルーアンに向かい、前回とは異なるホテルに逗留した（本展では、このとき描かれた連作の中から、ヤマザキマザック美術館の所蔵作品を展示）。窓から見える港湾風景について、次のように述べている。「サン・スヴェールの新市街、ぞっとするようなオルレアン駅のちょうど正面だ。駅は全く新しく、輝いている。煙突がたくさんあり、巨大なもの小さいもの、煙の飾り付き。前景には船と水。駅の左の方には労働者の界隈が、ポイエルデュ橋という鉄橋までずっと続いている。この橋は、朝霧の中、ほのかな陽光に包まれる」。この景色は、ありふれて凡庸なものに思われるかもしれないが、「ヴェネツィアのように美しい」と続けている（1896年10月2日付け、リュシアン宛て）。

ピサロは晩年にいたり、自在に光をとらえる円熟した表現に到達している。先の2作品を少し離れて見ると、巧みな陰影、橋の立体感、空間の奥行きが際立つ。窓の外で日ごと繰り返される人間の生活と、それを包み込む光と影。ピサロがカンヴァスに描きとめたのは、取るに足らない、当たり前前の光景がもつ美しさであった。（すずき・よしこ／当館学芸員）

## 「カミーユ・ピサロと印象派」展 関連行事

展覧会の会期中に開催した関連行事から、とりわけ盛況であった記念講演会と、当館では新たな試みとなった「高校生美術セミナー」についてご紹介します。

記念講演会は、会期中に2回。まず6月24日（日）に、本展監修者である宇都宮美術館学芸員の有木宏二氏による「印象派、けれど社会派—ピサロのまなざし」を開催しました。ピサロの書簡などの資料も交えながら、画家が追求めたものは何かを掘りさげる内容で、終演後も熱心に質問されるお客さまの長い列が出来ました。

7月22日（日）には、『怖い絵』シリーズや『印象派で「近代」を読む』などの著書で知られる中野京子氏に、「印象派のバリとアメリカ」と題し、ご講演いただきました。印象派の作品に描かれた何気ないアイテムから、19世紀という時代をあざやかに読み解く刺激的なお話に、会場の外にまであふれたお客様（小さなモニタでご迷惑をおかけいたしました）も、熱心に聞き入っておられました。

会期の後半は、ちょうど学校の夏休み期間にあたります。当館では、例年この時期に、小・中学生を対象とするイベントを開催していますが、これまでなかなか取り組むことの出来なかった高校生向けのプログラムとして、7月26日（木）から31日（火）に「高校生美術セミナー」を実施しました。参加者は、大阪芸術大学の先生方のご指導のもと、展示中の作品にもとづく絵画作品の制作に挑戦。5日間で、それぞれの個性と解釈を生かした作品を完成させました。（江上ゆか／当館学芸員）



集中して制作に取り組む  
高校生のみなさん

## 50回目を迎えた県展

当館の夏の恒例事業、県展が開催されました。今年は県展創設50周年にあたり、その記念として若干趣向を変えて開催しました。それは部門構成を見直し、「日本画」「洋画」部門を統一して「絵画」部門としたこと、50周年の「記念部門」として「テーマ“50”」部門を設け、「50」をテーマとする作品をジャンルを問わず募集したことです。前者は、日本画洋画の枠組みにとられない自由な絵画表現の創作を期すという意図をこめての見直しであり、後者は「県展50歳のお祝い」の意味を込めて設けたものです。昭和37年に兵庫県教育委員会と神戸新聞社との共催で「兵庫県美術公募展」という名称ではじまった県展は、昭和46年から兵庫県立近代美術館の主催事業となり、昭和56年を除き毎年開催されてきました。初期の審査員には小磯良平、川西英、寺島黎明、水越松南、吉原治良・・・といった錚々たる作家の名前が見られ、50年という時代を感じます。

今回は昨年を上回る735点の応募があり、審査の結果199点の作品が入選しました。各部門大賞の中から選ばれる「県展大賞」には奇しくも「テーマ”50”」部門の作品、高萩典子さんの〈CRY〉が選ばれました。来場者が選ぶ「県民賞」は岡山英二さんの〈アゲハチョウ〉に決まりました。

県展の開催にあたり、きめ細かいサポートをして下さいましたミュージアム・ボランティアの皆様、元気が仕事ぶりを見せてくれた博物館実習生の方々はこの場を借りて御礼申し上げます。（飯尾由貴子／当館学芸員）



県展会場風景



会場入口に設置した「県展50年のあゆみ」展示コーナー

## 兵庫県立美術館でのIPMについて

今年の夏のように蒸し暑い日が続くと、虫やカビが活性化しやすくなります。美術品にとって虫やカビは大敵です。例えば、ゴキブリは本の表紙などの糊の付いた紙も食べますし、カビは紙作品や油絵を傷めてしまうこともあります。

兵庫県立美術館では、美術品に影響のない範囲で節電にも配慮しつつ、カビの生えにくい温度と湿度を保ち、新たなカビの発生がないか観察を続けています。また虫については、展示室等にトラップを設置して、美術品とその周りに虫が生息していないか継続的に調査を行っています。

この活動はIPM (Integrated Pest Management 総合的有害生物管理) の考え方に基づくもので、元々は1960年代に農業分野で虫の駆除のために薬剤を過度に使用したことへの反省と地球環境への配慮から生まれた生物被害対策です。そして、これを美術館や博物館等に応用したものが文化財IPMです。文化財IPMは、虫やカビの生息状況調査とその情報分析、日常的に清掃活動を徹底することで、薬剤のみに頼らずに建物内の有害生物の発生を低い水準に維持し、美術品のある場所では虫がいないこと、カビによる被害がないことを目指すものです。

これを新しく資格化したものが「文化財IPMコーディネータ」であり、この夏私も取得してきました。この資格制度ができたことにより、文化財IPMを実践に行える人材の育成が促進され、地球にも美術品にも優しい美術品を守る取り組みが、より多くの美術館・博物館等に広まるのではないのでしょうか。

文化財IPMは、学芸員だけでなく、美術館で働く清掃スタッフや監視スタッフなど、より多くの方から情報を提供いただき、美術館全体で連携して取り組むことが重要になります。そこで当館では、館内で発見した虫の情報を保存修復グループに集約するシステムを作り、その情報を美術品にとってより安全な環境の維持に役立てています。今後も美術館全体でこの取り組みを継続し、さらに充実させていきたいと思います。（越 道子／保存修復グループ）



トラップ確認  
作業中の筆者

### ● — 編集後記

●今年の夏も、大変暑かったですね。開館10周年記念展「カミーユ・ピサロと印象派」展、それから開催50回目を迎えた県展が無事に終わり、兵庫県立美術館の暑い夏も過ぎてゆこうとしています。会期中はたくさんの方にご来場いただき、どうもありがとうございました。本号では、トピックスでこの2つの展覧会についてご報告するとともに、ピサロ展の副担当である鈴木学芸員からショート・エッセイをお届けいたします。

●その他、昨年度の新収蔵作品のご紹介や、当館で取り組んでいる館内環境の整備活動、そして学芸員採用の現状など、美術館運営のさまざまな話題に触れた内容となっています。（小野）

兵庫県立美術館  
quarterly report  
ART RAMBLE  
VOL.36

2012年9月30日発行  
編集・発行：兵庫県立美術館  
〒651-0073  
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1  
印刷：(株)サンメディア

# 学芸員の採用をめぐるって

## —美術史学会シンポジウムの参加報告

### 小野尚子



シンポジウムの様子

#### 美術館の周縁

今年の4月28日、「いまどきの新・学芸員—採用の現状と未来」というタイトルのシンポジウムが開催された。美術史学会の美術館博物館委員会が主催したこのシンポジウムは、日本の美術館博物館における学芸員採用の場において、非正規雇用や任期制の導入といった事例が増えてきた近年の動向に焦点をあて、現状を理解・共有することをねらいとしたものだった。同委員会は、これまでもシンポジウムで美術館博物館にまつわる諸問題を取り上げてきたが、このたびは、採用する側／される側双方の現場の声をひとつところに集めて聞くという、実験的な試みとなった。

この3月まで三年間ほど非正規職員だった筆者も、当館で学芸員として働き始めるまでの経緯を話させていただいた。シンポジウムの趣旨には、解決策を早急に求めるものではないこと、そして、現状のデメリットのみでなく、希望をもてる明るい側面にも目を向けようという意図も含まれていたため、先の見えない焦りから目の前の仕事に没頭していた当時の筆者にとっても、自分自身の職種とそのメリットを冷静に見つめなおす良い機会となった。

シンポジウムの第一部では、採用する側の事情を紹介するとして、東京国立博物館の鳥谷弘幸副館長と大阪市立美術館の篠雅廣館長が、各館の財政状況や組織運営をめぐる問題点をつまびらかにしつつ、非正規職員採用の苦心を伝えた。第二部では、美術館博物館施設で非正規職員として働く／働いた四人の事例が紹介された。それぞれの専門分野や業務内容に違いはあるものの、実務経験と業績をつめることを喜ぶ一方で、将来への不安を常に抱いているという複雑な胸中のまま、必死で働いていることが共通していた。

今の日本では、学芸員への道は千差万別であり、この手順を踏めば必ずなれるという確かな道筋も無い。シンポジウムには、さまざまな立場の人がそれぞれの思いを

胸に参加していた。現役の学芸員、学芸員を目指す学生とその指導教官、そして、まさに現在非正規雇用で働いている若手研究者などが同じ場で意見交換することは、貴重な機会であったと思う。会場の反応も、熱を帯びた率直なものであった。今回紹介された事例が、国立館や都市型美術館のケースに偏っていたため、地方館や小規模館での事例も考慮すべきだという意見もあれば、また、こうした非正規雇用の形態が今後ますます増えていくと、若手育成の妨げとなり、ひいては日本の美術館博物館の弱体化にもつながるのではないかと懸念の声もあがった。

美術館博物館における非正規雇用問題には様々な事情が絡んでいるため、解決のためには、長期的な視野に立った辛抱強い取り組みが必要になるだろう。このシンポジウムは、その第一歩となったかもしれない。筆者自身、このたび耳にした多くの意見を胸にとどめ、この問題を常に意識していきたいと思う。

最後に、一心に学芸員をめざしていた筆者個人の意見を述べさせていただけるなら、非正規雇用のメリットをより活かしてゆく方法もあるように思う。非正規職員としての経験は多くをもたらしてくれる。筆者が就いていた研究補佐員という職は、学芸員のアシスタントとして、美術館運営にさまざまな角度から関わるものだった。企画展の準備、収蔵品の管理、イベントの運営などさまざまな業務に携わっていく中で、学芸員の仕事の全体像をつかむことができたし、なにより、仕事を楽しみ、学芸員になりたいというモチベーションを保つことができた。しかし今の日本では、学芸員をめざす者の数に比べると、現場で実務経験をつむことのできるようなインターン制度や非正規職員雇用の枠は小さいのである。まずはこうした現場体験の場をより多く設けることで、学芸員の仕事というものを肌で感じとり、様々な経験をつんだ上で、本当にその職業をめざすかどうかという選択肢を、学生や若手研究者に提供することができるのではないだろうか。

(おの・なおこ／当館学芸員)



シンポジウムの様子



発表中の筆者